

桜散る(生きて虜囚の辱しめを受けず)

JJ1SXA/池

現在のように子供でも携帯電話、スマホを持っている時代と違い、電話も一般家庭に普及していなかったその昔、緊急の用件の伝達は「電報」だった。

そんな時代に「桜散る」は、合格発表会場へ結果を見に行った受験生が残念ながらの不合格を田舎の実家に知らせる時の電文だ。

電報料金は、1文字幾らだ、そしてこの電文の送受信は電話局の交換手達の有線電信だった、優秀な交換手達は高速度で長時間縦振れ電鍵を操っていたようだ、勿論和文モースだ。

電話局の有線通信・無線通信にまつわる悲しい話、沖縄の「ひめゆりの塔」にちなみ「北のひめゆり」といわれる「樺太真岡電話局」の九人の電話交換手の自決の話を下に書きます、「樺太1945年夏・氷雪の門」として1974年映画化(ただし当時は上映中止)。

ポツダム宣言を受諾して戦争は終結したにも関わらず、ソ連軍は樺太の国境線を越えて南下を続けていた、そして8月20日には、樺太南端の真岡市に上陸して街を蹂躪した。

その緊迫した状況の中、最後まで交換業務の任務を果たし、自らの命を絶った樺太真岡郵便局の9人の若き女性交換手たちが、本土との電話回線を確保していたが、ついに電話局が砲撃を受け、全ての電話線がソ連軍により切断された。

回線が切断される直前の悲痛な電話、「これが最後です。さようなら、さようなら」を最後に、9人の乙女達は青酸カリを飲んで自決したのですが、最後の通信は、責任者であった可香谷(よしがだに)シゲからの無線だった、「ワレニンムヲオエリ。サヨウナラ。サヨウナラ」と最後の力を振り絞ってキーを叩き、服毒したようだ、最後の打電の送信者、受信者の気持ちはいかばかりか…この9人の乙女達の頑張りや犠牲で、真岡市に結集していた日本軍は殆ど無傷で樺太から撤退したといわれています。

ヤルタ会談で連合国に対日参戦を約したソ連は、1945年8月「日ソ不可侵条約」を破棄して対日宣戦を布告し参戦したのだが、日本がポツダム宣言受諾で戦争は終結した後に、このように樺太に侵攻、今に至るも北方領土を不法占拠している、許せない。

ウクライナは旧ソ連時代の核兵器を自ら放棄し、非核兵器国となって、核兵器不拡散条約(NPT)に加盟したが、その前提に米国、ロシア、英国が署名した「ブダペスト覚書」という文書があり、ウクライナの安全保障を約束している、そのような国に対して、ロシアが軍事侵略を行ない、核の使用も仄めかす、とても許せることでは無い。

「花の命は短くて苦しきことのみ多かりき…」と詠んだのは林芙美子だが、短い命の花の最後を形容する言葉は、「散る」「落ちる」「崩れる」「しぼむ」「こぼれる」等色々ある。

「散る」のは桜、「落ちる」のは椿、「崩れる」のは牡丹、「しぼむ」のは朝顔、「こぼれる」のは萩、どれもこれも言葉通りだ、日本語はこまやかな表現ができる。

真岡電話局の、下は17才から最年長者が24才、平均年齢20.3才のうら若き9人の乙女たちの命は、はかなくも、短く、桜の花の如く潔く散った、良い、悪いは別に、教えられていた、戦陣訓の「生きて虜囚の辱しめを受けず」を忠実に実践したのだ。

自決した9名は公務殉職として、1973年(昭和48年)3月31日付けで勲八等宝冠章を受勲し、靖国神社に合祀されている。

九人の乙女の碑



可香谷シゲ(23才)
高石ミキ (24才)
吉田八重子(21才)
志賀晴代 (22才)
渡辺照 (17才)
高城淑子 (19才)
松橋みどり (17才)
伊藤千枝 (22才)
沢田キミ (18才)

(2022年10月記)